高田幸男・大澤肇 編著
新史料からみる中国現代史
——口述（オーラル）・電子化（デジタル）・地方文献（ローカル）

〈東方書店、二〇一〇年一二月、三五三頁〉

近年、限られた研究者のみがアクセス可能であった史資料や文献に対する閲覧や入手が比較的容易になりつつある。ここ十年における情報化社会の進行が、学問・研究分野へも波及し、閲覧と検索環境の充実がその要因としてあげられる。こうした環境整備により、公文書館や研究機関の垣根が取り払われ、自宅や研究室にいながらにして遠方に所蔵された限りなく本物に近い史資料に触れることが、可能になりつつある。本書は人間文化研究機構（NIHU）における現代中国地域研究拠点の一つである東洋文庫現代中国研究資料室による、そうした史資料の発掘、公開、利用に関するワークショップ、シンポジウム等で行われた報告を取りまとめた論文集である。

本書の概要は左の通りである。

はじめに
第Ⅰ部　口述（オーラル）
第Ⅱ部　電子化（デジタル）
第Ⅲ部　地方文献（ローカル）
あとがき
参考文献・索引

概要を見ていただけばわかるように、本書は「口述」「電子化」「地方文献」と三つのテーマを基に、史資料の活用と公開に関するトピックを取り上げ、その最新状況と課題がそれぞれ論じられている。そのため、本書が論じる範囲も近現代中国研究を主眼としつつも、その言及は中国のみに限定されたものではなく、日本、台湾などにおける史資料の整備状況や、各地域における取り組みなどが広く紹介されている。

冷戦終結とソヴィエトの崩壊から、ロシアに所蔵されてきた中国に関連する公文書の公開などにより、従来は閲覧が難しかった資料が「発掘」されることも増え、他方、中国においても「檔案法」の整備などにより、徐々にではあるが史資料を巡る環境は整いつつある。これと並行するように、日本、台湾においてもデジタルアーカイブスが整備され、相互利用が可能となっている。本書の「はじめに」においても指摘されているが、こうした新しい史資料の活用法は、今後の中国研究のみならず、地域研究にとって必須の技能となりつつある。その意味において、本書が対象としている読者は、「本格的に中国研究の道を進もうとする初学者や他分野の研究者」へ向けたものとなっている。構成、そして取り上げるトピックなど、そういった読者を意識したものとなっているが、本文に収められた論文は、日本、台湾、中国の研究者たちによる議論を基にしたものであり、単なる資料活用に関する論文の集合体ではなく、デジタルアーカイブ構築における方法論やフィールドワークの実践など多面的に論じられており、それ以外の読者に資するところも多いと思われる。（湯原健一）